

かかみがはら

百科
Kakamigahara
Encyclopedia

PLUS

スマートミュージアム
Kakamigahara

かかみがはら
百科プラス
2024
No.09

令和6年度
各務原市歴史民俗資料館企画展
坪内節太郎展

-芝居を見る-

第39回国際文化祭 第24回全国障害者芸術・文化祭
「清流の国ぎふ」文化祭2024
ともに・つなぐ・みらいへ ~清流文化の創造~
2024年10月14日(土)~11月24日(日)

両家が、おのれの思考や思慕、時に抵抗、を絵画に託す。これを僕は絵画人情と成す。洋の東西を問わぬところであった、と考える。

著書『絵画人情』より

坪内節太郎は、明治38年（一九〇五）五）、岐阜県稻葉郡那加村桐野（現各務原市那加桐野町）に生まれました。父・峯三郎は雑貨商と養蜂業を営んでいましたが、節太郎が10歳の時に一家で大阪市に転居しました。父は米相場で失敗し財を失い、一家は貧乏な暮らしとなります。それで実業家を目指していた節太郎ですが、お金が人を不幸にしていると考え、自分はお金に無縁な仕事をしたいと思うようになりました。

大正8年（一九一九）、14歳の節太郎は大阪商業学校に入学、この頃より歌舞伎や文楽を見に行くようになります。節太郎の芝居好きは文人気質の曾祖父や父の影響による所が多く、父は、しばしば幼い頃の節太郎を自転車の荷台に乗せて、芝居を見に行きました。

大正9年（一九一〇）、節太郎は大坂朝日新聞社編集部に給仕として入社し夜間勤務をしますが、その時に編集部で芸術・文学関係の本を読ん中止しています。

昭和20年（一九四五）1月には、岐阜県武儀郡美濃町（現岐阜県美濃市）に疎開します。戦後の昭和21年（一九四六）には、行動美術協会の会員に推举されたこともあり、同年開催の第1回行動美術展（東京都美術館）に出品しています。また、行動美術岐阜研究所を岐阜市役所の地下に開設し、中部行動美術研究所を名古屋市に開設して、中部行動美術研究会を開設して、岐阜市美濃町（現岐阜県美濃市）に疎開します。戦後の昭和21年（一九四六）には、行動美術協会の会員に推举されたこともあり、同年開催の第1回行動美術展（東京都美術館）に出品しています。また、行動美術岐阜研究所を岐阜市役所の地下に開設を同時に展示するなど、子どもたちの美術教育にも力を注ぎました。

また、昭和21年から岐阜県美術展、23年には岐阜市美術展の審査員工作を同時に展示するなど、子どもたちの美術教育にも力を注ぎました。



陣屋 12.6cm×16.4cm

きで言わば、根こそぎ惚れこんでいたともいえる」と記しています。

節太郎は、他にも国画会、独立美術展などに出品・入選を重ね、昭和13年（一九三八）、33歳の時に独立美術協会賞を受賞します。この年、節太郎は渡欧の準備をしますが、第二次世界大戦が始まつたため、渡欧を中止しています。

昭和20年（一九四五）には、岐阜市内にて美術教室を開いて小中学生に絵を教えたり、岐阜の画家を誘い「春雷」や「夏冬画壇」を結成したりと、昭和54年（一九七九）に74歳で亡くなるまで、地域の文化芸術の振興に貢献しました。

を務めています。

昭和27年（一九五二）には、岐阜市内にて美術教室を開いて小中学生に絵を教えたり、岐阜の画家を誘い「春雷」や「夏冬画壇」を結成したりと、昭和54年（一九七九）に74歳で亡くなるまで、地域の文化芸術の振興に貢献しました。

を務めています。

昭和30年（一九五五）母・てい死去。

昭和31年（一九五六）51歳

昭和32年（一九五七）52歳

昭和33年（一九五八）53歳

昭和34年（一九五九）54歳

昭和35年（一九六〇）55歳

昭和36年（一九六一）56歳

昭和37年（一九六二）57歳

昭和38年（一九六三）58歳

昭和39年（一九六四）59歳

昭和40年（一九六五）60歳

昭和41年（一九六六）61歳

昭和42年（一九六七）62歳

昭和43年（一九六八）63歳

昭和44年（一九六九）64歳

昭和45年（一九七〇）65歳

昭和46年（一九七一）66歳

昭和47年（一九七二）67歳

昭和48年（一九七三）68歳

昭和49年（一九七四）69歳

昭和50年（一九七五）70歳

昭和51年（一九七六）71歳

昭和52年（一九七七）72歳

昭和53年（一九七八）73歳

昭和54年（一九七九）74歳

だり、先輩から話を聞いたりしたことが、後に画家としての人生を決めきっかけになりました。節太郎は、始めは詩人を目指していましたが、「文学に比べ、絵画がより楽しく、自己の人情をそつと伏せることも出来るため、志望を変更し、かしつ「僕は画家に成つたら人を悦ばし、病人の病気を忘れさす」そういった絵を描きたいと著書『絵画人情』に記しています。

節太郎は、大正15年（一九二五）、21歳の時に第3回春陽会展に出品しました《風景（暁日）》が初入選します。それを機に上京し、中川一政に師事しました。

河野通勢にも学びます。昭和3年（一九二八）、23歳の節太郎は、毎日新聞連載の小酒井不木作「懷疑狂時代」の挿絵を描き、それ以降、新聞や雑誌の挿絵を数多く描きます。

また、この年に岸田劉生に会い、「劉生の油絵は申すまでもなくその後年に於てものされる様になつた日本画の類をも含め、私は文句なしの好

21歳の時に第3回春陽会展に出品しました《風景（暁日）》が初入選します。それを機に上京し、中川一政に師事しました。

河野通勢にも学びます。昭和3年（一九二八）、23歳の節太郎は、毎日新聞連載の小酒井不木作「懷疑狂時代」の挿絵を描き、それ以降、新聞や雑誌の挿絵を数多く描きます。

また、この年に岸田劉生に会い、「劉生の油絵は申すまでもなくその後年に於てものされる

歌舞伎のスケッチ

操り三番叟

絵本太功記

節太郎は、墨を矢立に満たし、和紙の写生帖を持つて芝居見物に行きました。役者が見得を切った時や、心の機微を感じさせる手先足先の演技に至るまで、はつとさせられた瞬間を素早く筆で捉え、余白に色の指定や役者の名前、感想を書き留めています。そして合間に、忘れず掛け声を発していたそうです。

スケッチからは節太郎の独特の歌舞伎の見方がうかがえます。

節太郎は画家であるだけではなく、隨筆を書いたり俳句を作ったりする文人でもありました。歌舞伎については、昭和36年（一九六一）から、昭和48年（一九七二）まで『演劇界』誌に「芝居スケッチ」の記事と表紙および扉絵を連載しました。



『演劇界』表紙絵 昭和38年3月号
23.5cm×18.0cm



連獅子 34.7cm×46.5cm



三番叟 53.8cm×38.2cm

「三番叟」は、五穀豊穣を祈念する儀式の舞から発展し、歌舞伎の祝祭舞として演じられています。節太郎は、舞いの姿を流れような筆線で紙面に留めています。



太十正清光秀 14.0cm×20.2cm



太功記十段目 14.2cm×20.0cm

尾田春長（織田信長）を討った武智光秀（明智光秀）の謀反を良く思わない光秀の母・豊月の隠居先へ、光秀の妻・操と息子・十次郎、その許嫁・初菊が訪れます。初菊は十次郎に出陣をやめるよう懇願しますが、十次郎は戦場に赴きます。宿敵・真柴久吉（羽柴秀吉）は旅僧に扮して隠居先に滞在しており、そこに現れた光秀は、久吉を狙った槍で誤って母を刺してしまいます。さらに出陣した十次郎が深手を負って戻り、光秀に戦局を伝え、父を思い思案てる中、敵・佐藤正清（加藤清正）と久吉が現れ、光秀と戦場で再び相まみえることを誓って別れていきます。



無題 13.4cm×17.9cm

源氏の武将・熊谷直実は、平家の公達・平敦盛を組み敷きますが、敦盛は実は後白河法皇の子であるため、源氏側も討ち取ることはできません。敦盛の首実検の場面では、主君・義経が命じた「一枝（敦盛）を切らば一指（小次郎）を剪るべし」を守り、実子・小次郎を身代わりにした直実の悲哀が描かれています。



桜丸切腹 13.5cm×17.7cm

三つ子の兄弟のうち梅王丸、桜丸は、菅丞相（菅原道真）に、松王丸は敵方の藤原時平に仕えています。時平の陰謀で、丞相は養女・丸屋姫を使って皇位を狙う謀反を企てたとして太宰府に流罪となりますが、親王と丸屋姫の仲をとりもつたのは桜丸でした。父・白太夫の七十の祝いで三兄弟は帰省しますが、桜丸はそこで覚悟の切腹をします。



勧進帳 15.0cm×22.5cm

源頼朝に追われる弟・九郎判官（源義経）を警護しながら、東北に逃れようとする弁慶ら家来たち。安宅の関守・富樫左衛門は、山伏に扮した一行を怪しみます。勧進帳を読むように命じられた弁慶は、手持ちの巻物を勧進帳のように読み上げますが、強力（荷物持ち）に扮した義経の正体が発覚してしまいます。弁慶は、咄嗟に主君を打ち据え、その気迫に感じ入った富樫は、叱責覚悟で一行の通行を許します。



おかる 11.0cm×13.5cm

浅野内匠頭が、殿中で吉良上野介に斬りかかった刃傷事件を元に、室町期の『太平記』の人物に当てはめて演じています。七段目では、敵討ちを計画する大星由良之助の元へ届られた討ち入りの密書を、恋文と勘違いした遊女のお軽が、手鏡を使って盗み見ている場面が描かれています。



静・狐忠信 13.8cm×18.7cm

源義経が匿われている館に、臣下の佐藤忠信が到着します。しかし、静御前が持っている鼓を打つと、そこにも佐藤忠信が現れます。不思議に思い問いただすと、鼓は「初音の鼓」といい、靈力のある狐の皮で作られており、この忠信はその子どもの狐で、父母懐かしさのあまり出て来たと答えます。義経は鼓を忠信に与え、忠信は、敵襲の折にその恩に報います。



名古屋於みその 14.5cm×18.2cm

仮名手本忠臣蔵「祇園一力茶屋」

義経千本桜「川連法眼館」

勧進帳

谷嶺軍記「熊谷陣屋」

連獅子

操り三番叟

三番叟

芝居絵と水墨画

節太郎は、昭和43年（一九六八）に刊行した『水墨画入門』の実技篇において、水墨画の描き方について説明しておます。表紙の作品は、鮎をモチーフに、墨の潤滑を活かして描かれ、淡彩を施しておます。また、文字を添え、味のある作品に仕上げておます（写真3・4）。

芝居のスケッチは、仕事に関係ない密かな愉しみであつたと述懐する通り、観劇後の豊かな時間を増幅させたものでした。芝居絵にみられる肥瘦のある掛けは、水墨画の独特な表現と通底するものがあつます。

節太郎は、画家として独立協会展や行動美術展等に出品を重ねて来ましたが、そのほとんどは油彩の作品でした。最初は風景や静物を写実的に描いていましたが、次第にそれは東洋的な表現の抽象画に移行していくおます。

芝居絵を含めたら、それの作品も、雅趣に富み、表現における枯淡の境地を潤養しておつゝ、とても趣深じむのになつておる。



写真3 淡彩を施す

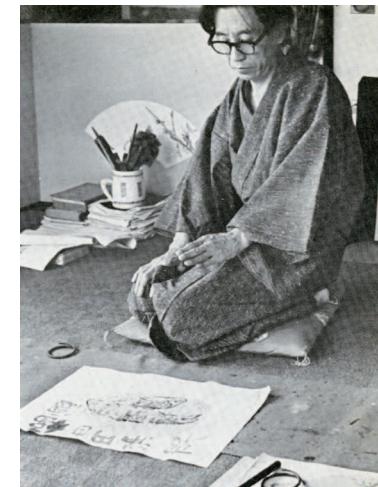


写真4 完成した作品



かかみがはら百科+ 坪内節太郎展 -芝居を見る-

本事業は、公益財団法人せきしん地域振興協力基金の助成を受けています。
本資料の無断転写、転載、複製を禁じます。
©各務原市教育委員会